



©2007 DreamWorks LLC and Kite Runner Holdings, LLC. All Rights Reserved.

『君のためなら千回でも』
恵比寿ガーデンシネマ、
シネスイッチ銀座ほか全国にて
2月9日(土)公開

文化の違いをものともしない、 マックイーンとマスタング

誰もが知っていて、何かしらのイメージを持つクルマは、映画の中でキャラクターとして成り立つ。白眉はフェラーリとボルシェでハリウッド映画への登場回数はダントツだろうが、アメリカ車ではマスタングとその兄弟たちがかなり健闘している。「反骨、男っぽさ」というイメージは同時代の多くのクルマに共通しているが、そこから頭ひとつ抜けたのは68年型が映画『ブリット』に使われた影響が大きい。ある年齢から上の人間にとっては、いまだにマスタングといえばスティープ・マックイーンなのだ。

この正月近辺に公開された作品でも数本にマスタング系が登場しているが、『君のためなら千回でも』での登場は独特だった。舞台は1978年、まだ平和だった時代のアフガニスタン。裕



福な家庭に生まれた主人公アミールは、使用人の息子ハッサンと兄弟同然に育つ。ふたりは映画が好きで、『荒野の7人』を何度も見に行っはマックイーンがいいとかチャールズ・ブロンソンがいいとか言いながら盛り上がる。ハッサンの誕生日、アミールの父親ババが、買ったばかりの新車でふたりを迎えに来る。69年型の黒いマスタングだ。ふたりは「ブリットのクルマだ!」と大喜びで駆け寄ってくる。この翌年、アフガ

ニスタンはソ連によって侵攻され、ババとアミールはアメリカへと渡る。出国の手数料はふたりで1万ドル。到底払えないこの金額が、マスタングを与えることでクリアになる。こういう場面を見るたびに、アメリカ文化の大衆性に驚く。マックイーンとマスタングのカッコよさは、文化と国境を軽く越える。グローバルなのである。

切ないのはその後だ。どうにかアメリカで暮し

始めた父子は、スタンドを営みながら細々と暮し始める。ある日、店に真っ赤な70年型のマスタングに乗った客がやってくる。「いい車だな」と思わず言ったババにとって、マスタングはもう手

が届かないものになっている。だが映画はそれでも反骨と誇りを失わないババを見せ、実はどうしようもなく卑屈なアミールがその息子として恥じない男になるまでを描いてゆく。中東を描く映画は難しいと思われがちだが、ハッサンをめぐる陰惨な過去に、隠された衝撃の真実に、因縁の対決に……と、韓流ドラマかと思うくらいサービスたっぷり。実はハリウッドのスタジオ映画、アメリカの大衆性たっぷりの娯楽作だ。



渥美志保

映画ライター、コラムニスト。数々の人気雑誌に映画関連のコラムを執筆している。映画に登場するクルマで最も好きなのはボンド・カーのアストン・マーティン。